

青森市埋蔵文化財発掘調査報告書 第33集

# 新町野遺跡

試掘調査報告書

平成8年度

青森市教育委員会

## 序

青森市の南にそびえ立つ八甲田山の麓ではここ数年来開発行為に伴う埋蔵文化財発掘調査が相次いでおります。

青森市教育委員会では、平成8年度に市内新町野地区において牛館川防災調整池造成事業に係る新町野遺跡試掘調査を実施いたしました。本書は、その調査を収録した報告書であります。

調査の結果、本遺跡は、縄文時代と平安時代の集落跡であったことが判明いたしました。

この調査成果が広く埋蔵文化財保護と研究に活用され、地域の歴史学習におきましても役立つことができれば幸いと存じます。

最後になりましたが、関係機関並びに各位からのご指導、地元各町会からのご協力、さらに工事主体者である青森県土木部のご理解に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成9年3月

青森市教育委員会

教育長 池 田 敬

## 例 言

1. 本報告書は、青森市教育委員会が平成8年度に実施した牛館川防災調整池掘削工事に係る埋蔵文化財包蔵地新町野遺跡試掘調査報告書である。
2. 新町野遺跡の遺跡番号は01161である。
3. 執筆及び編集は、調査担当者である木村淳一、設楽政健が分担して行い、その執筆担当は、文末に付した。
4. 土層の注記は、「新版標準土色帖」(小山、竹原;1993)に準拠した。
5. 試掘調査における出土遺物・実測図・写真等は、現在青森市教育委員会で保管している。
6. 調査の実施にあたり次の方々からご指導・ご協力を頂いた。記して感謝を表す。

(敬称略・順不同)

青森県埋蔵文化財調査センター、相馬信吉、中嶋友文

## 凡 例

本報告書内で使用する、略称・表現方法・スクリーントーン等は以下のとおりである。

- [略称]・「第 号住居跡」 「 住・ H」 ・「第 号土坑」 「 土」  
・「第 号焼土遺構」 「 焼」 ・「第 号溝状遺構」 「 溝」  
・「十和田 a 火山灰」 「To - a」 ・「白頭山・苫小牧火山灰」 「B - Tm」

[スクリーントーン]

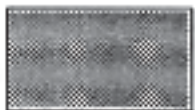
地 山



焼 土



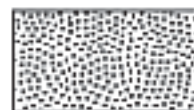
礎石器に見られるスリ



礎石器に見られるタタキ



礎石器に見られる凹み



# 目 次

序

例言

凡例

目次

第 章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査要項	1
第3節 調査方法	2
第 章 遺跡の環境	4
第1節 遺跡の位置	4
第2節 周辺の遺跡	4
第3節 調査区域内の基本層序	6
第 章 調査成果	7
第1節 検出遺構	7
第2節 出土遺物	13
第3節 遺跡範囲について	17
まとめ	17
写真図版	
報告書抄録	

## 第 章 調査の概要

### 第 1 節 調査に至る経過

青森県土木部河川課（以下県土木部）は、青森市南部に現在造成が進められている青森中核工業団地に関して、これまで既存の牛館川を防災調整池として造成する計画を策定した。

事業予定地内に埋蔵文化財の所在の有無の確認によって、当事業予定地に周知の埋蔵文化財包蔵地である新町野遺跡の所在が確認された。

これに伴い県土木部は、青森県教育庁文化課（以下県文化課）に対して周知の埋蔵文化財包蔵地に対する措置について事前協議を行った。

協議において、新町野遺跡そのものの北側範囲の状況が十分把握されていない点などから試掘調査の必要性が生じた。しかし、激増する発掘調査の件数に伴う県埋蔵文化財調査センターでの対応が難しいことから、遺跡所在地の管轄である青森市教育委員会に調査依頼がなされることとなった。

平成 8 年 9 月 18 日付け青河第 326 号にて青森県知事より青森市教育委員会教育長宛てに調査の依頼がなされた。

これを受けて当委員会では、埋蔵文化財保護と開発行為との円滑な調整を図るため調査依頼を受諾することに至り、平成 8 年 9 月 24 日付け青市教委社第 449 号において受諾の旨の回答を行った。

予算については、年度途中ということで 9 月補正に計上し、対応した。 (木村 淳一)

### 第 2 節 調査要項

#### 1. 調査目的

牛館川防災調整池事業に係る堀削工事に先立ち、工事予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の試掘調査を実施し、遺跡の性格、規模、範囲等を捉え、以降に想定される発掘調査に向けてより詳細なデータを確保しておくとともに地域社会の文化財の活用に資する。

#### 2. 遺跡名及び所在地

新町野遺跡（しんまちの）

青森市大字新町野字菅谷 ほか

3. 事業年度 平成 8 年度

4. 試掘調査期間 平成 8 年 10 月 16 日（月）～平成 8 年 11 月 21 日（木）

5. 調査面積 1,500 m<sup>2</sup>（調査対象面積 25,000 m<sup>2</sup>）

6. 調査委託者 青森県土木部河川課

7. 調査受諾者 青森市教育委員会

8. 調査担当機関 青森市教育委員会生涯学習部社会教育課埋蔵文化財対策室

9. 調査協力機関 青森県教育庁文化課

10. 予算措置 調査委託者側で措置

## 11. 調査体制

調査事務局 青森市教育委員会

教 育 長	池 田 敬
生涯学習部長	永 井 勇 司
社会教育課長	山 田 章
埋蔵文化財対策室長	藤 正 夫
室 長 補 佐	福 士 敦
埋蔵文化財係長	石 岡 義 文
主 事	田 澤 淳 逸
”	小 野 貴 之
”	木 村 淳 一 (調査担当)
”	児 玉 大 成
”	沼宮内 陽一郎
”	設 楽 政 健 (調査担当)

### 第3節 調査方法

市教育委員会で調査を実施した調査対象範囲は、新町野遺跡範囲の北側部分にあたり、その南側は、県埋蔵文化財調査センターによって、青森中核工業団地造成事業に係る試掘調査が行われていた。

そこで、県埋蔵文化財調査センターで設定したグリットを調査範囲にも適用することとした。県埋蔵文化財調査センターで既に設定されていたグリットのうちMA - 160とMB - 160を結ぶラインを東西の基軸とし、LV - 165、LQ - 165で適宜南北のラインを確認してグリットのラインを移動した。

調査対象範囲での測量原点の設置は、既に現地に設置されていた原点(標高17.441m)を基準とし、ここからの原点移動を行い、調査範囲内に数箇所設置した。

新町野遺跡の調査対象範囲は25,000㎡であったが、調査対象範囲内の北端と南端部分は、削平を大幅に受けており、試掘調査と範囲確認という今回の調査の趣旨から、表面上あまり削平等がなされていない部分を中心としてグリットのラインに基づいてトレンチを設定し調査にあたり、北端部分のうち東側の部分については、坪掘りによって残存状況、堆積状況を確認した。

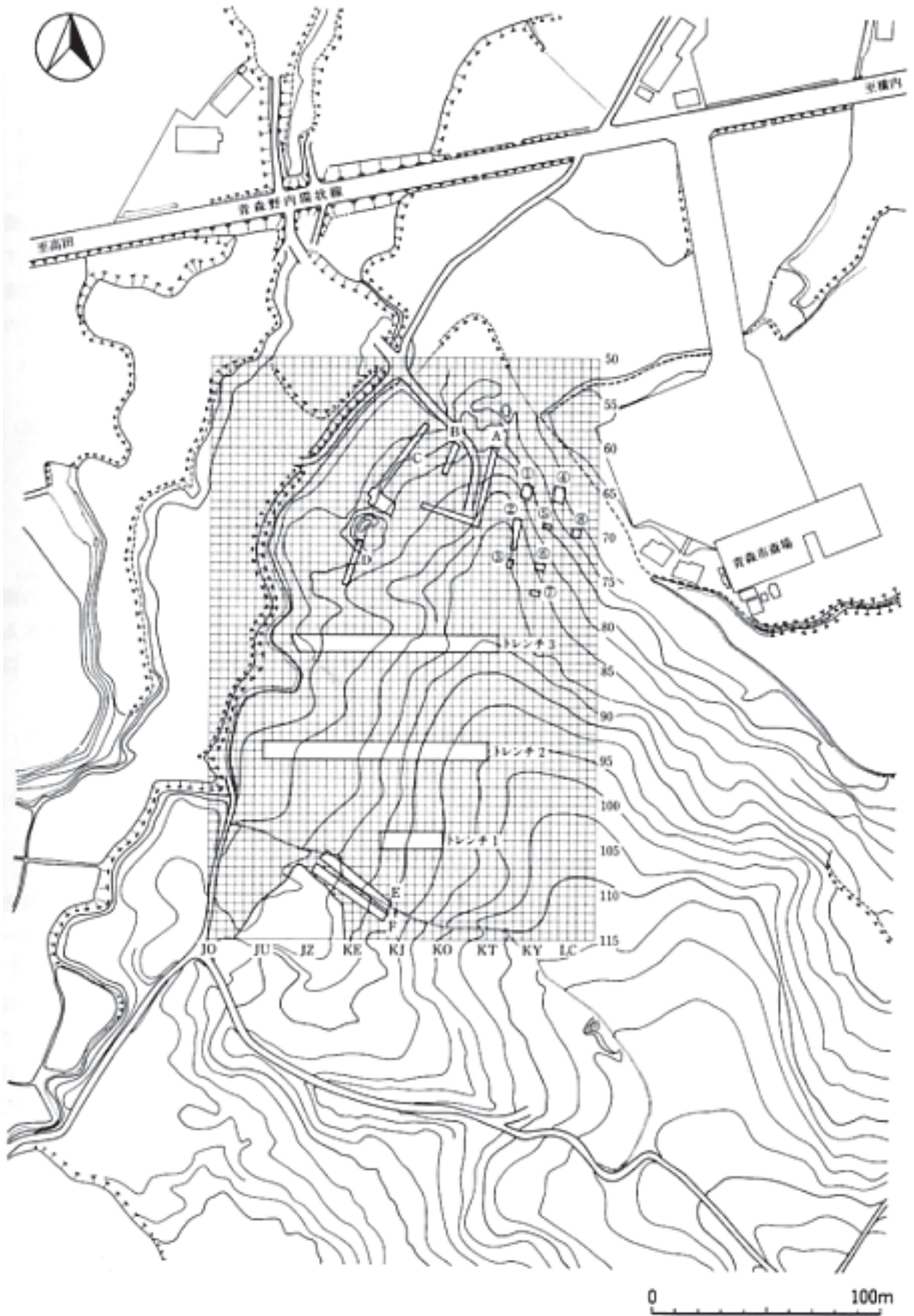
また、北端西側の部分は、東側の部分に比べてかなり削平を受けており、コンクリートなど廃材等が置かれており、人力による除去が難しいため重機を導入し、その残存状況を確認した。

南端部分は、遺構確認面より下部まで削平されており、廃材等が盛られていたが、廃材のない部分についてはジョレンがけを行い遺構等の残存状況を確認した。

各トレンチの呼称については、調査区中央部のトレンチを南側からトレンチ1・2・3とし、調査区北側の坪掘りの部分をサブトレンチ1～8とし、北端西側の重機を導入した部分と南側のジョレンがけを行った部分をトレンチA～Fとした。

なお、今回は試掘調査として遺構の確認に主眼を置いたことから、検出した遺構については遺構精査は行わず平面図、写真撮影での記録にとどめることにした。また、遺物の取り上げについては、包含層出土のものについては一括で取り上げ、遺構からのものについては、確認面上部のものをその遺構の下限と特定するため一部取り上げた。

写真撮影においては、35mmモノクロームとカラーリバーサルフィルムを併用した。(木村 淳一)



第1図 新町野遺跡地形図並びにグリッド配置図 (S=1/2,500)



## 第 章 遺跡の環境

### 第 1 節 遺跡の位置

青森市は、北を陸奥湾、西を大釈迦丘陵、東から南を八甲田山に連なる火山性台地に囲まれている。市域北側の青森平野は、新生代第四紀に形成された海岸平野である。本遺跡は南側の火山性台地に続く、牛館川と合子沢川に挟まれた丘陵の北端部に位置している。この火山性台地は、八甲田カルデラから噴出した八甲田火砕流堆積物（田代平溶結凝灰岩）から構成されたもので、緩傾斜の広い平坦面が存在する。本遺跡は、青森平野と南側の火山性台地の境界部分に沿って走る青森野内環状線と県道荒川・青森停車場線の交差点から東方に約0.8kmの所にある斎場の西側から南側に広がる標高約20～30mの丘陵の先端部に位置し、遺跡西側約0.5kmには総合流通団地、南西側約0.2kmには南部工業団地が存在する。

遺跡が存在する丘陵は山林となっており、野内環状線を隔てた北側一帯には水田が広がっている。

（設楽 政健）

### 第 2 節 周辺の遺跡

本遺跡は、八甲田カルデラから噴出した八甲田火砕流堆積物、いわゆる「田代平溶結凝灰岩」から構成された火山性台地につづく丘陵の北端に位置している。本遺跡の周辺には、緩傾斜の平坦面を有する丘陵が川を隔てて幾筋も広がっており、主にそれらの平坦面を利用したいくつかの遺跡が存在する。以下、それらの遺跡を概観したい。

荒川と入内川に挟まれた台地上に存在する小牧野遺跡は、縄文時代後期前葉の環状列石を主体とし、縄文時代後期前葉の遺物を中心に、縄文時代前期から続縄文までの遺物を出土している。環状列石は、全国的にも類例の少ない独特の配石方法を呈し、構築の際、土地の造成工事を行っている点など、その学術的な重要性から、平成7年3月に国史跡の指定を受けている（青森市教育委員会1996）。

荒川と合子沢川に挟まれた丘陵地上には、葛野(2)遺跡と野木遺跡等がある。葛野(2)遺跡は、今年度、青森市教育委員会で発掘調査を行い、縄文時代前期の遺物と平安時代の遺物、竪穴式住居跡4軒が検出されている。野木遺跡は、本遺跡が存在する丘陵の南側に位置し、今年度、県埋蔵文化財調査センターによる発掘調査が行われ、平安時代の大規模な集落跡であったことが確認されている。

合子沢川と横内川に挟まれた台地上には、桜峯(1)、(2)遺跡等がある。桜峯(2)遺跡は、平成6年の発掘調査では、縄文時代中期を主体とする遺物が出土し、竪穴式住居跡、土坑、配石遺構などが検出されている（青森市教育委員会1995）。桜峯(1)遺跡は、平成6年度から青森市教育委員会による発掘調査が行われ、縄文時代前期末葉の遺物を主体とし、中期、後期、晩期、平安時代の遺物が出土している。また、横内川と駒込川に挟まれた台地上に存在する遺跡の主なものに、四ツ石遺跡がある。四ツ石遺跡は、昭和38年、39年に青森市教育委員会による調査が行われ、縄文時代後期前半の遺物を主体とし、それに伴う配石遺構が検出されている（青森市教育委員会1965）。

（設楽 政健）





第2図 新町野遺跡位置図並びに周辺の遺跡位置図 (S=1/50,000)

第1表 周辺の遺跡

番号	遺跡名	時代	種別	備考	遺跡番号
1	小牧野遺跡	縄文(前・中・後・晩) 続縄文	包蔵地	葛西勲・高橋潤 1989 青森市教育委員会 1996	01176
2	山吹(1)遺跡	縄文中期	散布地	青森市教育委員会 1991	01186
3	山吹(2)遺跡	縄文	散布地		01187
4	葛野(1)遺跡		散布地		01217
5	葛野(2)遺跡	縄文前期・平安	散布地	青森市教育委員会 1997刊行予定	01218
6	野木遺跡	縄文・平安	集落跡	青森県教育委員会 1995・96調査	01210
7	横内遺跡	縄文(早・前・中)	散布地	青森市教育委員会 1995	01164
8	桜峯(2)遺跡	縄文中期	集落跡	青森市教育委員会 1995	01208
9	桜峯(1)遺跡	縄文(前・中・後・晩) 平安	集落跡	青森市教育委員会 1998刊行予定	01207
10	横内城跡	中世	館跡	青森市教育委員会 1987	01174
11	四ツ石遺跡	縄文(中・後)	散布地	青森市教育委員会 1965	01028
12	四ツ石(2)遺跡	縄文(中・後)	散布地		01194
13	田茂木野遺跡	縄文晩期	散布地	青森市教育委員会 1986	01160
14	阿部野遺跡	縄文・平安	集落跡		01050
15	阿部野(3)遺跡	平安	散布地		01220

### 第3節 調査区域内の基本層序

基本層序は、次のとおりである。

第層 表土

第層 黒褐色土(10YR3/1)シルト質。平安時代の遺物包含層。

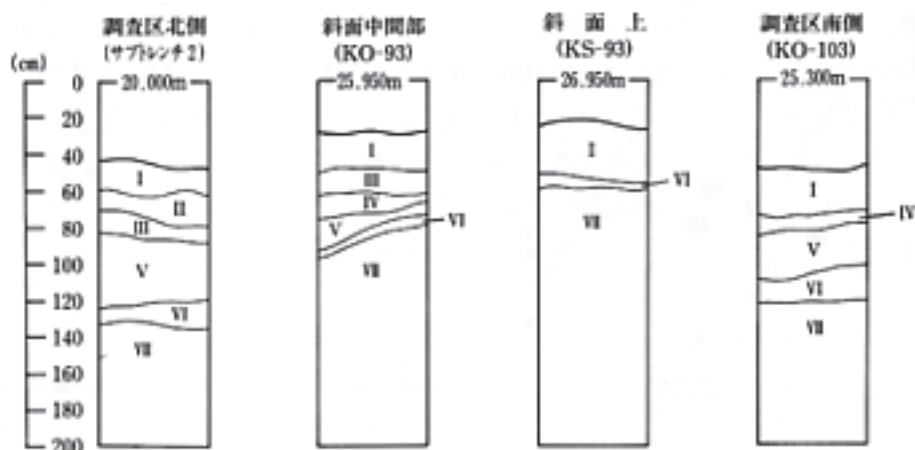
第層 黒褐色土(10YR2/1)シルト質。無遺物層。

第層 暗褐色土(10YR3/3)シルト質。無遺物層。

第層 黒褐色土(10YR3/1)シルト質。縄文時代前期末の遺物包含層。

第層 褐色土(10YR4/4)漸移層。

第層 ローム層。



第3図 新町野遺跡基本層序模式図

(設楽 政健)



## 第 章 調査成果

### 第1節 検出遺構

今回の調査によって検出した遺構は、竪穴式住居跡14軒、竪穴状遺構1基、土坑32基、ピット32基、埋設土器遺構4基、焼土遺構2基、溝状遺構2条である。以下各調査トレンチごとに概要を記すことにする。

#### トレンチ1(第1図・第4図)

トレンチ1内においては、第 層において縄文時代前期末円筒下層d式に属する遺物包含層が確認されたが、その出土量は少量である。

検出遺構は、土坑2基、ピット1基であり、いずれも小規模なものである。

#### トレンチ2(第1図・第4図)

トレンチ2内においては、基本土層で確認された層位である第 層から第 層までが削平を受け、欠落している。遺構については、標高27m付近を中心に遺構が散発的に検出されており、竪穴式住居跡2軒、埋設土器遺構4基、土坑7基、ピット3基を検出した。このうち第1号竪穴式住居跡の覆土上面からは、円筒下層d式の土器片が出土している。

#### トレンチ3(第1図・第5図)

トレンチ2で確認された土層とほぼ同様の堆積状況で上面の第 層から第 層までは、削平を受け、欠落している。遺構については、縄文時代に属すると思われる竪穴式住居跡2軒、土坑14基、ピット18基、溝状遺構1条を検出した。

#### サブトレンチ1(第1図・第6図)

サブトレンチ1は、第 層黒褐色土層中から竪穴状遺構1基を検出した。一部黒褐色土の為不明であるが、平面プランは方形であると思われる。この遺構の直下には風倒木を検出した。

#### サブトレンチ2(第1図・第6図)

部分的に攪乱を受けており、表土除去の段階で縄文時代後期前葉十腰内 式土器、円筒下層d式土器が混合して出土している。黒褐色土の面から暗褐色土のプランが確認されたため、テストトレンチを入れたところその直下に、円筒下層d式に伴う楕円形のプランを持つ竪穴式住居跡2軒を確認した。土坑3基を検出した。

#### サブトレンチ3(第1図・第6図)

土坑1基を検出した。円筒下層d式の土器片2片が出土している。

#### サブトレンチ4(第1図・第6図)

第 層を除去したところ、焼土粒が2m × 1.5mの範囲で広がりを見せていた。遺物の出土はなかった。

サブトレンチ5(第1図・第6図)

東傾する斜面であり、削平は受けていない。遺構は検出されなかった。

サブトレンチ6(第1図・第6図)

削平は受けていない。遺構は検出されなかった。

サブトレンチ7(第1図・第6図)

サブトレンチ6と同様の堆積状況である。遺構は、平面形が円形の小規模な土坑1基を検出した。帰属時期については不明である。遺物については、第層中より円筒下層d式の細片が出土しているのみである。

サブトレンチ8(第1図・第6図)

第層を除去した面でサブトレンチ4と同様の焼土粒を面的に確認した。また、焼土面には、上位に白頭山火山灰、下位に十和田a火山灰を部分的に検出した。遺物については、平安時代の土師器小甕1点、甕破片2片が出土している。また、テストトレンチをいれてみたところ漸移層である第層が確認されなかった。

トレンチA(第1図A・第7図)

遺構確認面より下部まで削平を受けていたが、埋められていたコンクリート等を除去したところ、平安時代の竪穴式住居跡4軒を検出した。遺物が確認されず詳細な年代については不明である。

トレンチB(第1図B・第7図)

トレンチAと同様かなり削平を受けていた。平安時代の竪穴式住居跡1軒と土坑を1基を検出した。

トレンチC(第1図C・第7図)

トレンチA・Bと同様の状況であったが、部分的に削平を免れている部分がある。平安時代の竪穴式住居跡3軒と溝状遺構1条、土坑1基を検出した。

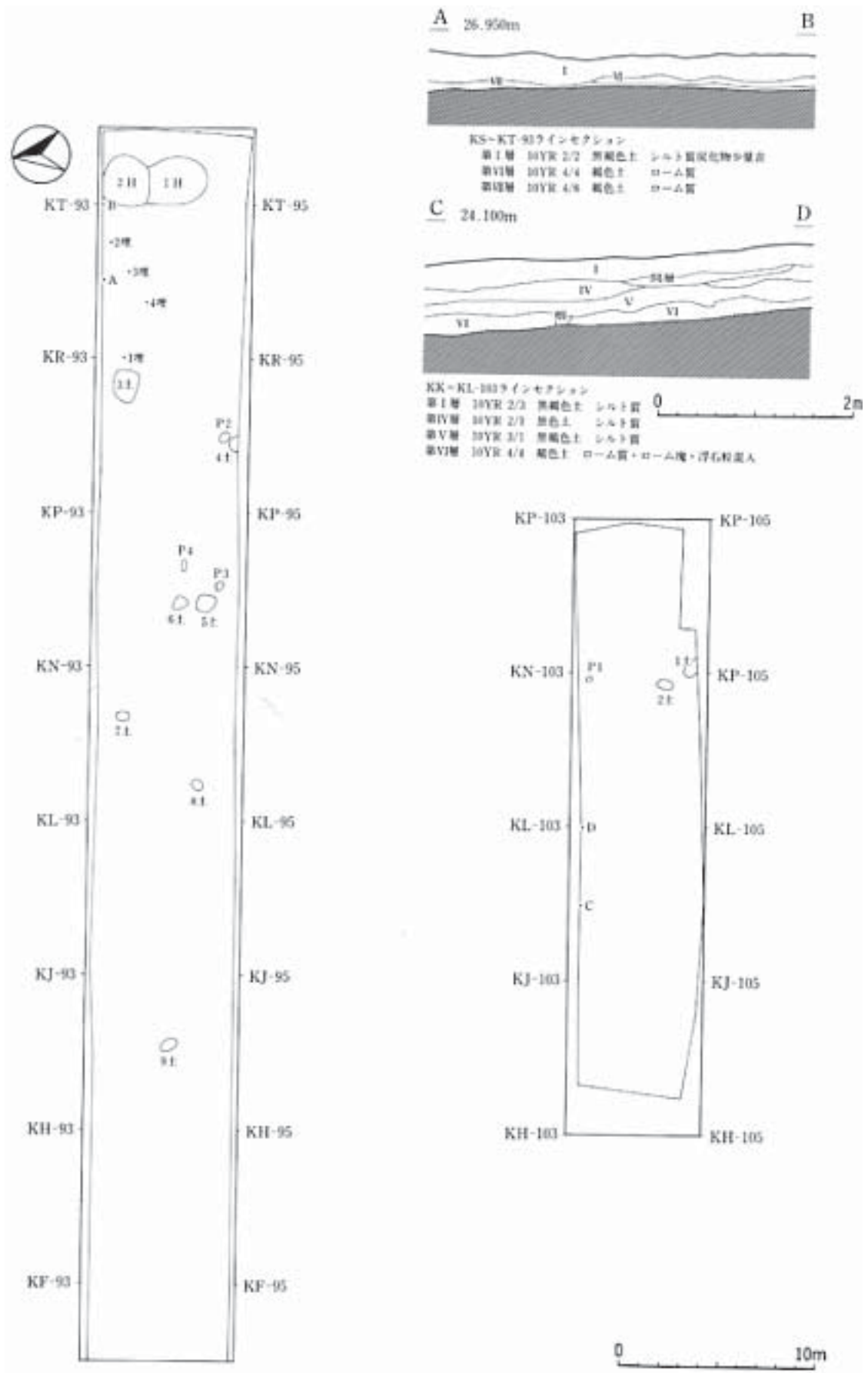
トレンチD(第1図D・第7図)

土盛りが行われている部分はあるが削平は受けていない。土坑2基、ピット1基を検出した。出土遺物は土師器片1片と鉄滓2塊である。

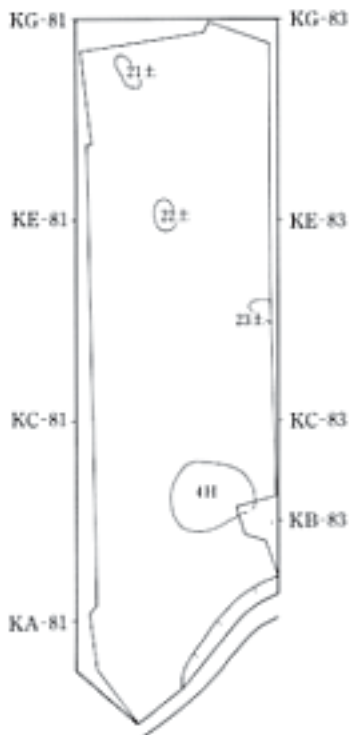
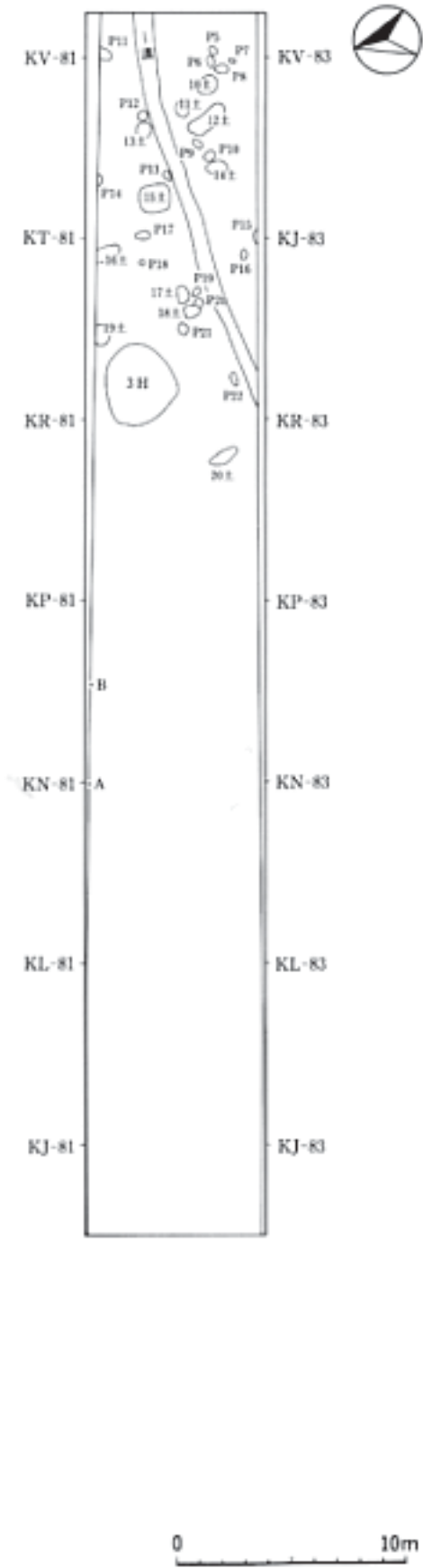
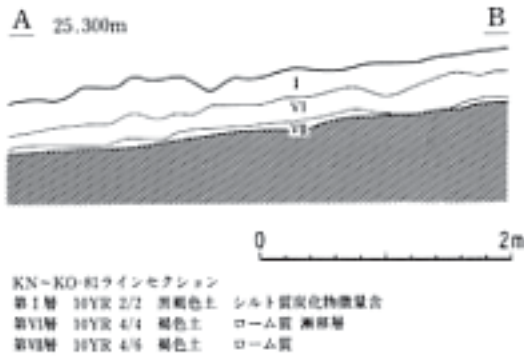
トレンチE・F(第1図E・F)

この部分は、削平を大幅に受けている部分であり、遺構は確認されなかった。

(木村 淳一)

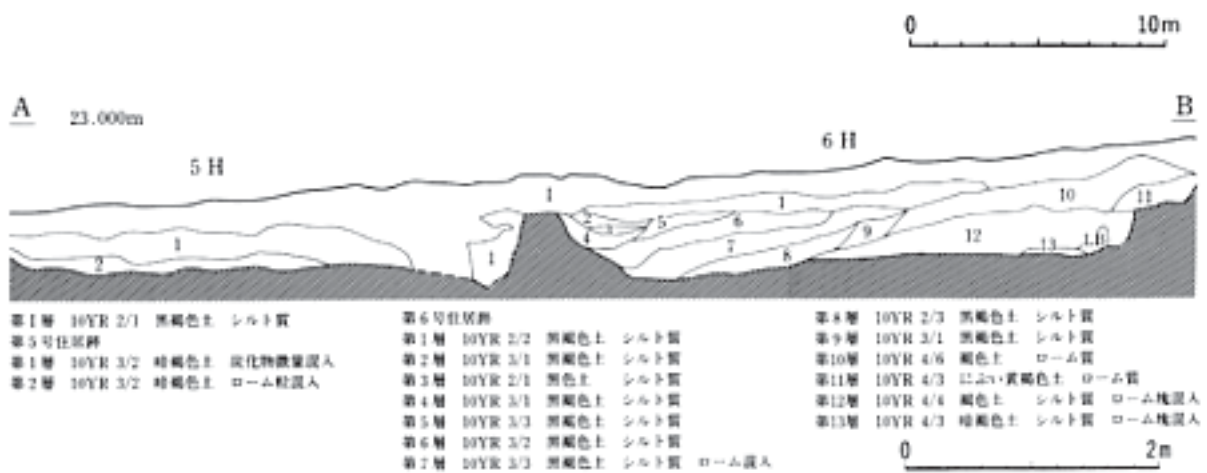
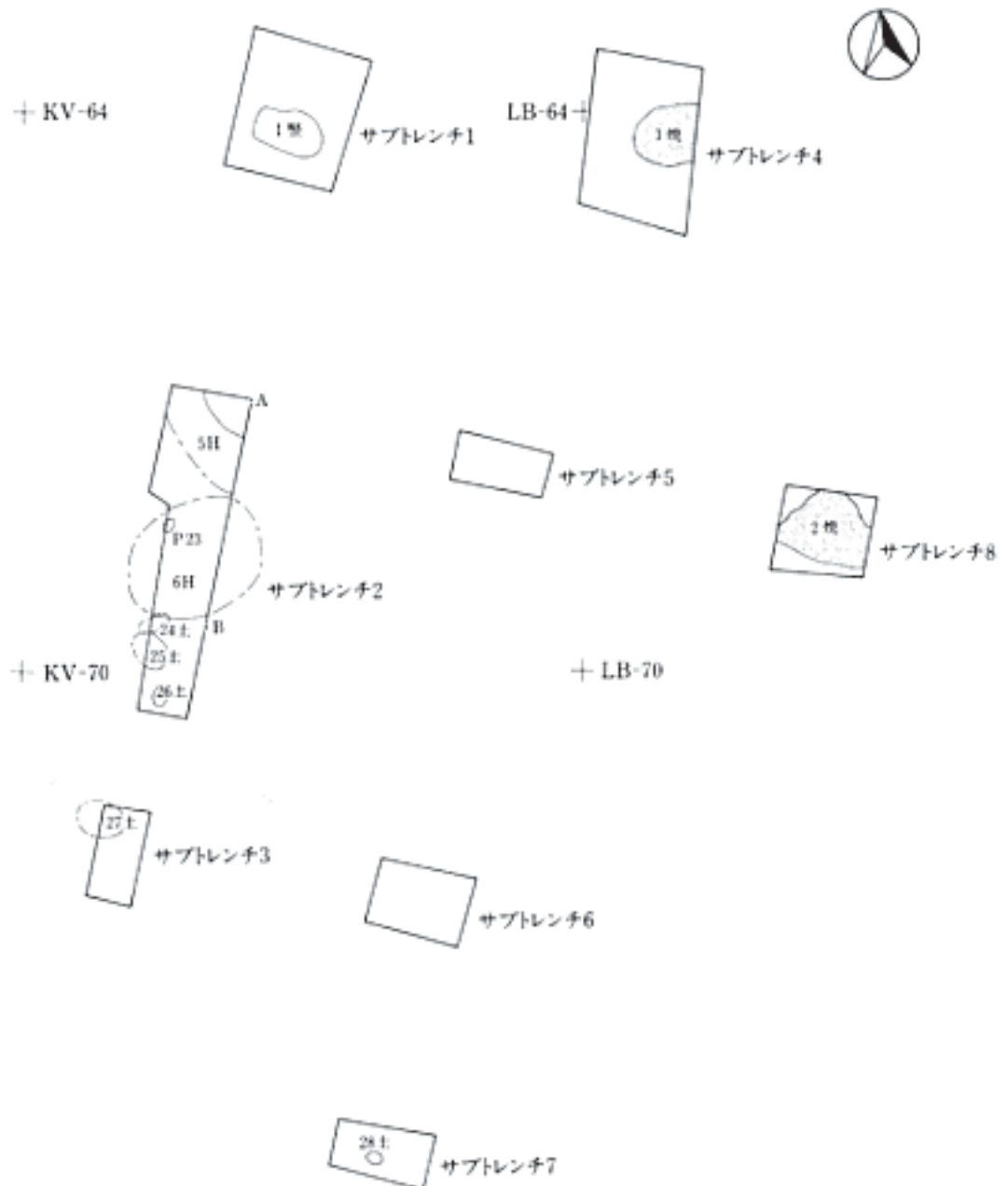


第4図 トレンチ1・2遺構配置図 (S=1 / 300) 及びセクション図 (S=1 / 60)

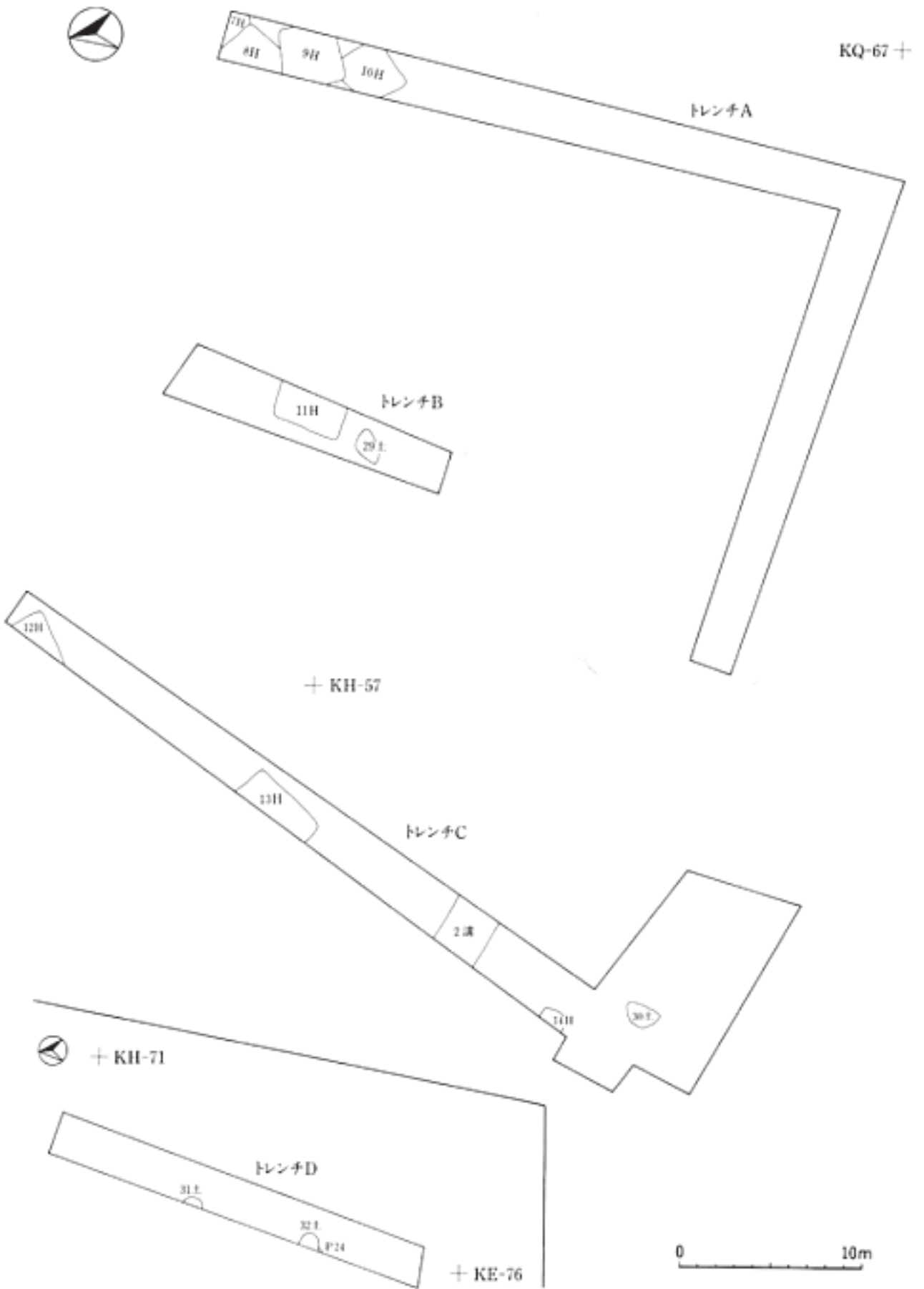


第5図 トレンチ3 遺構配置図 (S=1 / 300) 及びセクション図 (S=1 / 60)





第6図 サブトレンチ遺構配置図 (S=1/300) 及び第5号及び第6号住居跡確認セクション図 (S=1/60)



第7図 トレンチA・B・C・D遺構配置図 (S=1 / 300)

## 第2節 出土遺物

### 1. 土器

今回の調査によって出土した遺物は、包含層出土のものが主体となり、段ボール約1箱の量であった。時代は、縄文時代前期・後期・平安時代のものであり、なかでも調査区中央部を中心とした縄文時代前期末葉の円筒下層d式が総出土数の大半を占めている。本項では、時期毎に第 群～第 群に分類した。

#### 第 群 縄文時代前期末葉に属するもの。(図8 - 1 ~ 15)

円筒下層d式に属する資料であり、今回の調査で出土した土器の大半を占める土器である。破片資料が主であり、接合資料はほとんどない。1は、口縁部文様帯に絡糸体による回転施文が見られ、胴部文様は、左撚り撚糸による絡糸体回転施文である。2～9は、口縁部破片であり、2、3は、絡糸体回転施文によるものである。4、5、7、8、9は、押圧施文によるものである。6は口縁部文様体が欠落しており、繊維の混入量が多いため剥落しており文様が明瞭ではないのであるが、胴部上半にはRL縄文が施されたものと推定される。

10～15は、胴部及び底部の破片である。10は、複節RLRの回転施文によるものであり、11は単節RLの回転施文によるものである。12は、絡糸体回転施文によるものである。13は、トレンチ2第1号住居跡覆土上面から出土した土器で羽状縄文が施されている。14は、11と同一個体の可能性があり、15は、1の底部の可能性のある破片である。

#### 第 群 縄文時代後期前葉に属するもの。(図8 - 16 ~ 19)

縄文時代後期十腰内 式土器に属する資料である。16は、網目状撚糸文が施された深鉢の口縁部であり、17は、地文として単節LRの斜縄文を施文したのち、幅広の沈線で文様を描いている口縁部破片である。18は、サブトレンチ2から出土した口縁部破片であり、無文である。19は、サブトレンチ3から出土した無文の土器であり、突起を有する。突起部のみだけでは異質な感はあるが、本群に収めることにする。

#### 第 群 平安時代に属するもの。(図8 - 20 ~ 27)

北側のサブトレンチを中心として出土した。20は、サブトレンチ8の焼土遺構の確認面上から出土した土師器小甕である。口径12cm、器高12cm、底径5.8cmを測り、口縁部は、波状を呈する。外面調整は、剥離がはげしいが、口縁部直下から下半まで上下方向のヘラ削りである。内面調整は、幅1cmのヘラ状の工具を使用したナデである。底部調整は、削り調整である。10世紀初頭～中葉に属するものと思われる。甕破片のうち、21は、外面調整は、ロクロ成形が行われたのち、底部側から口縁部側に向けてヘラ状工具でケズリをおこなっている。22は、胴部破片で外面調整は、ヘラ削り、内面調整は、横方向のヘラナデである。23の底辺部1点はトレンチDから出土しており、外面調整はヘラナデで、底面には砂粒が付いたいわゆる砂底土器である。

24、25、26は、土師器坏破片であり、いずれもロクロ水挽き成形である。24は、口縁部下に強い稜を持つ。26は、内面黒色処理されている。須恵器は、1点出土している。27は、器種は不明であるが、胴部破片であり、内外面ともロクロによるナデ調整がされている。ほぼ、前述の土師器の時期と同時期に帰属するものと推察される。

(木村 淳一)

## 2. 石器

今回の調査では8点の石器が出土した。その内訳は、石鏃1点（第9図1）、不定形石器5点（第9図2～6）、用途不明の礫石器1点（第9図8）、半円状偏平打製石器1点（第9図7）である。

第9図1は、KU - 94グリッドから出土した。全体的に細身であり、両面に丁寧に調整が加えられている。一見、尖基ないし円基を呈するように見えるが基部の末端には細かい調整が加えられており、意図的に基部を直線的に調整しているものと考えられる。石質は珪質頁岩である。第9図2は、KZ - 65グリッドから出土した。背面、腹面ともに細部調整がほとんど施されていないが、一部分に使用に伴うと思われる微細剥離が見られる。石質は珪質頁岩である。第9図3は、KP - 81グリッドから出土した。背面、腹面ともに側縁に調整が施され、刃部を作出している。石質は流紋岩である。第9図4は、KT - 94グリッドから出土した。素材剥片の背面の傾斜を利用し、連続的な剥離によって緩斜度な刃部を作出している。細部調整と折れ面の新旧関係から、ある程度の長さをもつ石器が故意に折られたか、または偶然折れたかによってできた石器であると推測される。石質は珪質頁岩である。第9図5は、KB - 93グリッドから出土した。背面、腹面ともに細部調整がほとんど施されておらず、使用に伴うと思われる微細剥離が見られる。剥片の鋭利な側縁をそのまま使用したのと考えられる。石質は珪質頁岩である。第9図6は、K0 - 104グリッドから出土した。背面の両側縁は連続的な剥離によって刃部調整が施されている。一部層理面がみられる。腹面は、ほとんど調整が施されていない。石質は珪質頁岩である。第9図7はKP - 103グリッドから出土した。表面、裏面ともに調整が施され、側縁の1部分に刃部が作出されている。石質は閃緑岩である。第9図8は、KN - 94グリッドから出土した。表面、裏面ともに弧の縁辺部に研磨によって刃部を作出している。また直線を呈する一辺の片面には、連続的な剥離によって調整が施されている。直線を呈する一辺の細部調整と折れ面の新旧関係から、もともと半円状を呈していたと考えられる。石質は安山岩である。

（設楽 政健）

## 3. その他の遺物

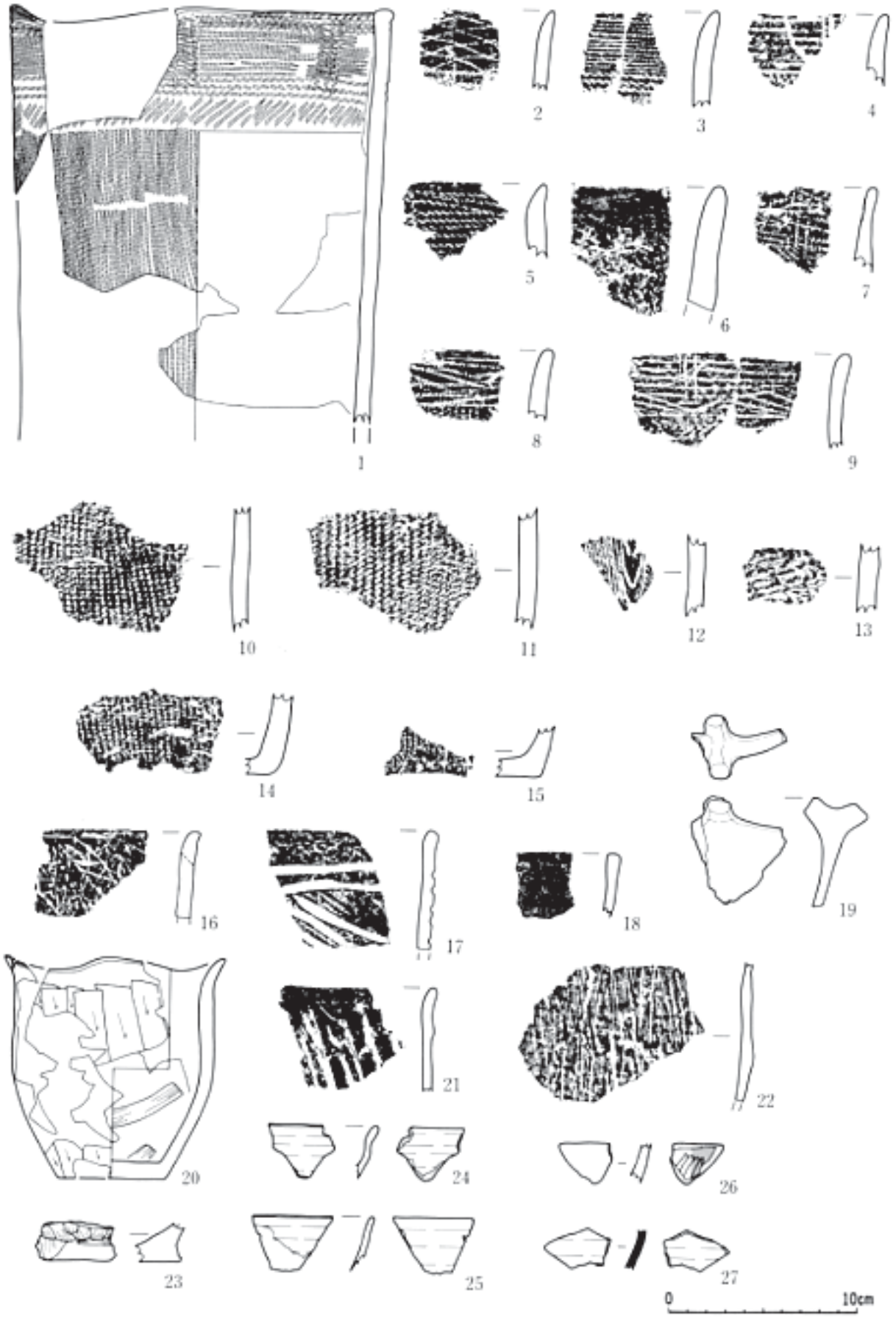
トレンチDの32土上面から前述した土師器底部と共に鉄滓2塊が出土した（写真図版4 - 9、10）、土師器底部の年代と同時期の所産であろう。

### 土器観察表(1)

図版番号	出土地点	層位	器種・部位	外面の文様	分類
8-1	KN-104		深鉢・口縁～胴部	平口縁、絡糸体回転、LR圧痕	
8-2	KN-104		深鉢・口縁部	平口縁、絡糸体回転（格子目状）	
8-3	KN-104、KI-104		深鉢・口縁部	平口縁、絡糸体回転	
8-4	KO-104		深鉢・口縁部	平口縁、側面圧痕	
8-5	KM-103		深鉢・口縁部	平口縁、側面圧痕	
8-6	KO-104	根	深鉢・口縁部	平口縁、RL縄文？	
8-7	KD-104		深鉢・口縁部	平口縁、側面圧痕、LR斜縄文	
8-8	KO-104	根	深鉢・口縁部	平口縁、側面圧痕	
8-9	KN-104		深鉢・口縁部	平口縁、側面圧痕	
8-10	KN-104		深鉢・胴部	複節RLR回転	
8-11	KN-104		深鉢・胴部	単節RL回転	
8-12	KD-83		深鉢・胴部	絡糸体回転（木目状）	
8-13	KT-94 1H	フク土	深鉢・胴部	羽状縄文	
8-14	KN-104		深鉢・胴～底部	複節RLR回転	
8-15	KN-104		深鉢・底部	絡糸体回転	
8-16	KN-83		深鉢・口縁部	網目状燃糸文	
8-17	サブトレ2 (KT-61)		深鉢・口縁部	沈線文、LR斜縄文	
8-18	サブトレ2 (KT-61)		鉢・口縁部	無文	
8-19	サブトレ3 (KV-69)		鉢・口縁部	無文、突起	

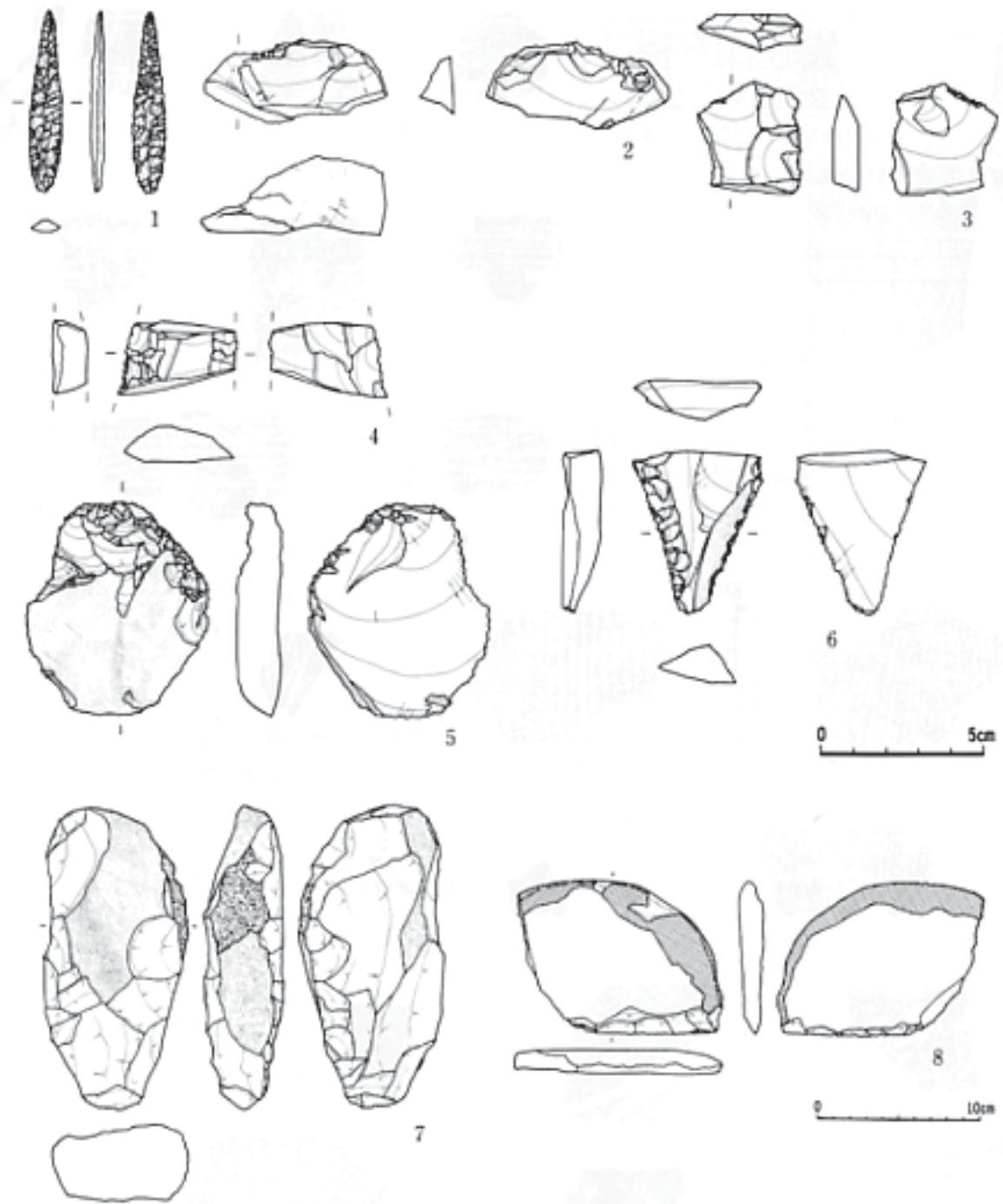
### 土器観察表(2)

図版番号	出土地点	層位	種別	法 量 (cm)			外面調整	内面調整	底部調整	分類
				口 径	器 高	底 径				
8-20	サブトレ8		土師器・小甕	12.0	12.0	5.8	ヘラケズリ	ヘラナデ	ヘラケズリ	
8-21	サブトレ8		土師器・甕	-	-	-	ロクロナデ、ヘラケズリ	ロクロナデ	-	
8-22	サブトレ8		土師器・甕	-	-	-	ヘラケズリ	ヘラナデ	-	
8-23	トレンチD		土師器・甕	-	-	-	ヘラナデ	ナデ	砂底	
8-24	サブトレ1	1層フク土	土師器・坏	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	
8-25	サブトレ1	1層フク土	土師器・坏	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	
8-26	サブトレ1	1層フク土	黒色土器・坏	-	-	-	ロクロナデ	ヘラミガキ	-	
8-27	サブトレ1	1層フク土	須恵器・？	-	-	-	ロクロナデ	ロクロナデ	-	



第8図 新町野遺跡出土遺物(1)





番号	出土地点	層位	最大計測値				石質	分類	備考
			長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)			
1	KU-94		52.0	39.0	10.0	2.0	珪	石鏃	
2	KZ-65		27.0	53.0	58.0	30.1	"	不定形	
3	KP-81		35.0	42.0	33.0	12.0	流紋岩	"	
4	KT-94		23.0	38.0	36.5	11.0	珪	"	
5	KB-93		67.0	38.0	56.0	49.8	"	"	
6	KO-104	根	51.0	38.0	40.0	18.8	"	"	
7	KP-103		190.0	38.0	92.0	1102.0	閃緑岩		
8	KN-94		128.0	38.0	96.0	243.8	安山岩	半円状	

第9図 新町野遺跡出土遺物(2)



### 第3節 遺跡範囲について

今回、当委員会で調査した地区は、周知の埋蔵文化財包蔵地である新町野遺跡の北側部分にあたる。ここで今回の試掘調査から得られた所見を述べることにする。

調査前の段階での土地の現況が既に大部分削平を受けており、丘陵の地形等についてかなりの変化を受けていることが調査によって確認したため、削平以前の土地利用状況を把握するため、1975年撮影の『青森市航空写真地図』で遺跡内の土地の利用状況を比較検討したところ、北側の削平部分は原野並びに山林、鉄塔の高圧線付近が大幅に削平を受けた原野、調査区中央部付近は原野、南側の部分は畑地であったことを確認した。

既に1975年段階で遺跡内の基本堆積において改変が生じていたことが、試掘調査で確認した堆積状況においても裏付けられており、調査区北側並びに南側部分は、さらに削平を受けて現在に至ったことになる。

縄文時代前期の集落については、サブトレンチ2で検出した住居跡と調査区中央部のトレンチ2から検出した住居跡・埋設土器遺構などが標高27m付近を中心として位置している。南側の削平を受けた部分は、調査範囲内からは遺構が検出されず、調査範囲外南東側の削平部分から一部遺物・遺構が確認されている。このことから、その主体部分は調査区域外の南東側丘陵頂部付近を中心として集落が展開するものと推定される。

また、調査区北側の削平を受けた部分からは、平安時代の竪穴式住居跡を8軒検出し、平安時代の集落の様相が捉えられた。この広がり、西方向へは、丘陵部と河岸段丘面との境界まで続くものと推定される。南方向へはトレンチD・KE - 76付近まで延びるものと推定されるが、調査区中央部付近トレンチ1・2・3では検出されないところから、丘陵の先端部付近を中心とした利用状況が推定される。

この結果から、新町野遺跡の遺跡範囲については、既登録の範囲内に遺跡が存在することが確認され、その時期については、縄文時代前期、平安時代を主体とする複合遺跡であることが確認された。

(木村 淳一)

## ま と め

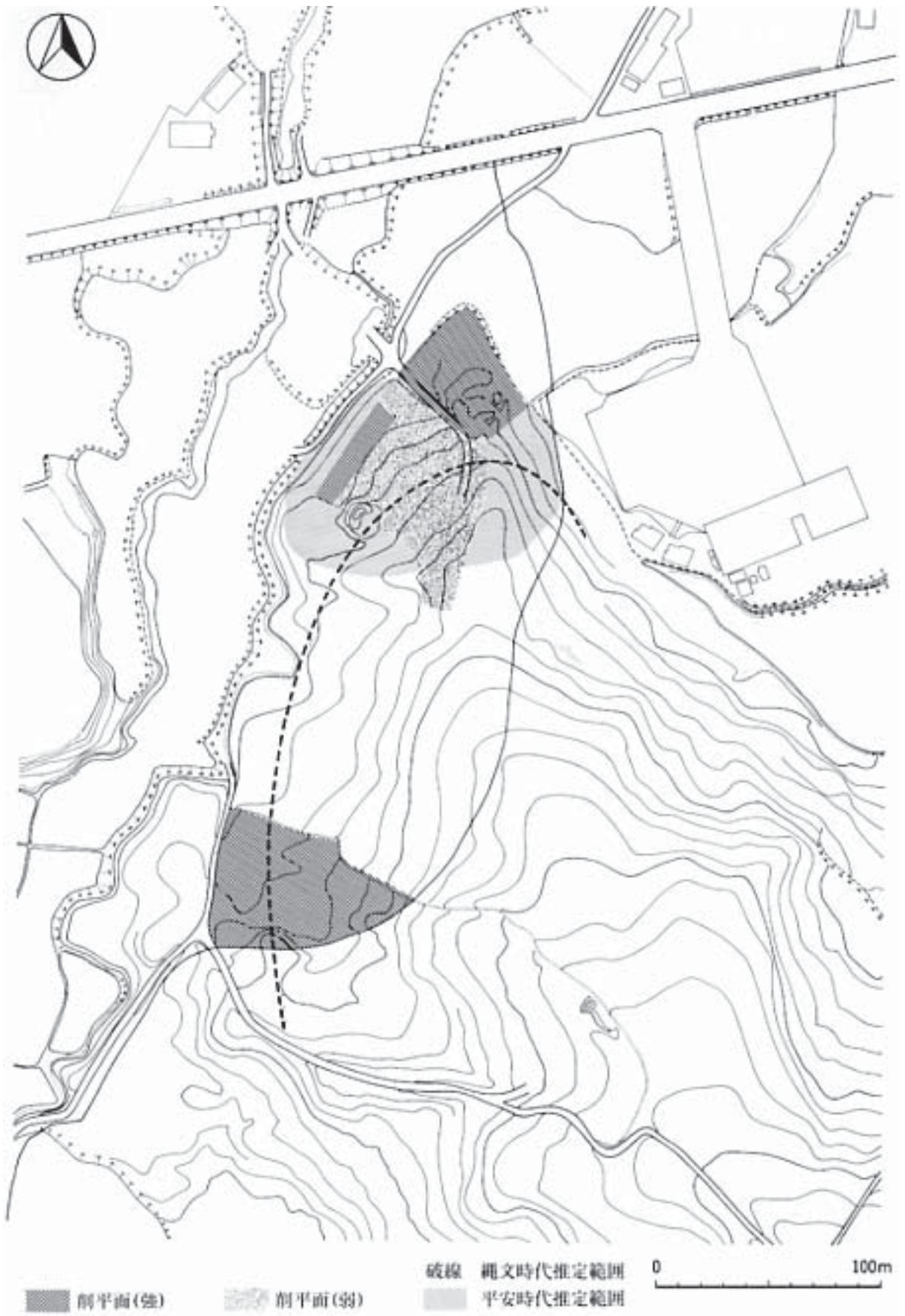
新町野遺跡は、青森市大字新町野字菅谷に所在する遺跡である。立地環境は、牛館川と合子沢川によって挟まれた八甲田火砕流堆積物を基盤とする火山性台地にあり、平野部に突き出した標高20m～30mの丘陵上に位置する。

試掘調査は、調査対象面積25,000㎡に対し、約6%に相当する約1,500㎡を対象とした。調査の結果、確認した遺構は、竪穴式住居跡14軒（縄文時代6軒・平安時代8軒）、土坑32基、埋設土器遺構4基、竪穴状遺構1基、溝状遺構2条、ピット32基である。

出土遺物は、土器・石器含め投ボール1箱が出土した。土器は、縄文時代前期末葉円筒下層d式を中心として、縄文時代後期前葉十腰内式、平安時代の土師器・須恵器が出土した。

新町野遺跡の北端部は、平安時代の集落跡の様相を呈し、また、丘陵頂部にかけての地域は、縄文時代前期末葉の集落跡が展開する複合遺跡であることが確認された。

(担当者一同)



第10図 新町野遺跡範囲図(北側部分)





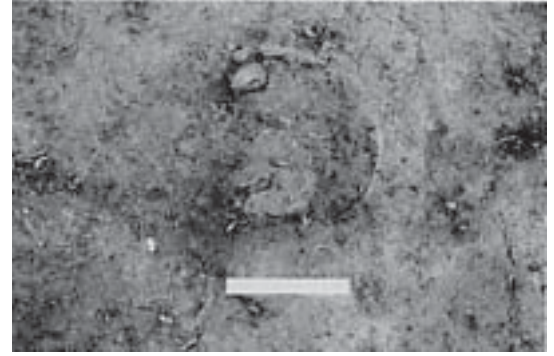
調査前遺跡遠景 (N )



基本土層 (S )



トレンチ2近景 (W )



第1号埋設土器遺構確認面 (W )



トレンチ3近景 (E )



第3号住居跡確認面 (W )



サブトレンチ2近景 (S )



第5・6号住居跡確認セクション (NW )



トレンチA近景(N )



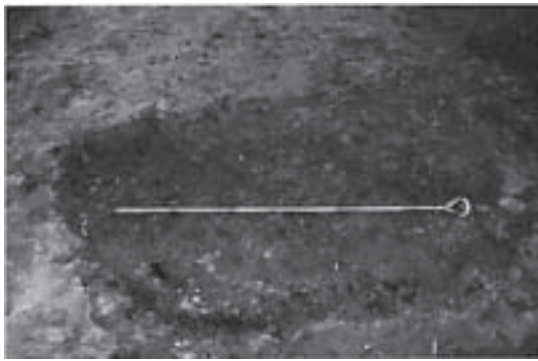
第10号住居跡確認面(W )



第14号住居跡確認面(E )



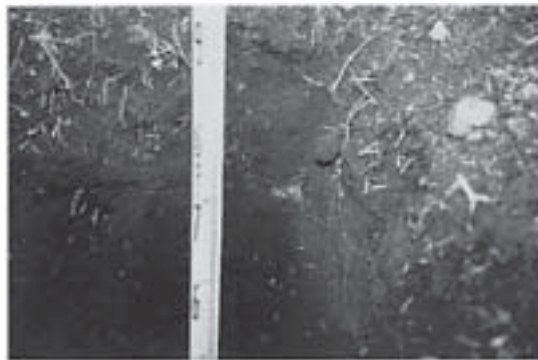
第29号土坑確認面(W )



第30号土坑確認面(W )



第2号焼土遺構確認面(W )

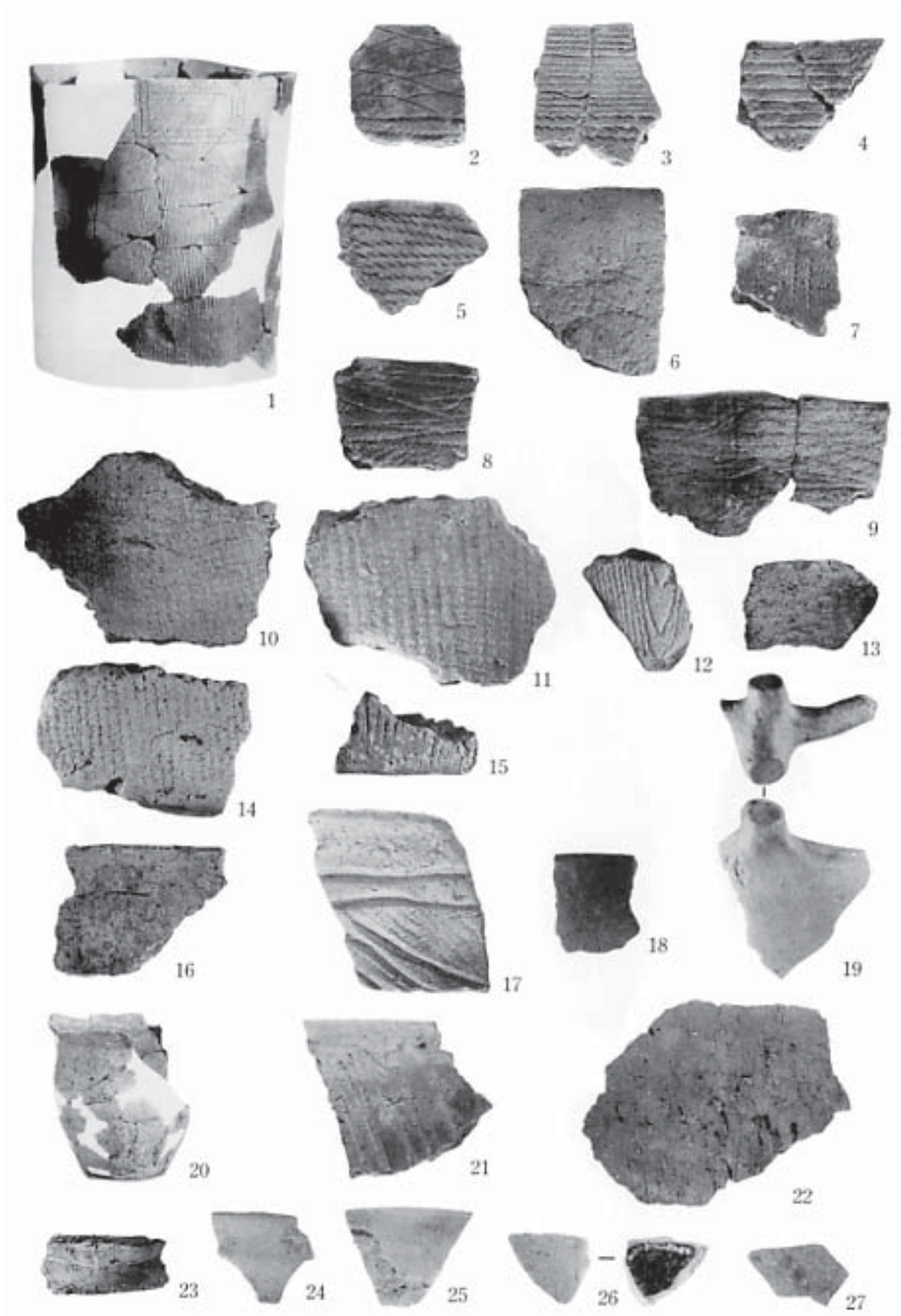


白頭山・苦小牧火山灰検出状況(W )

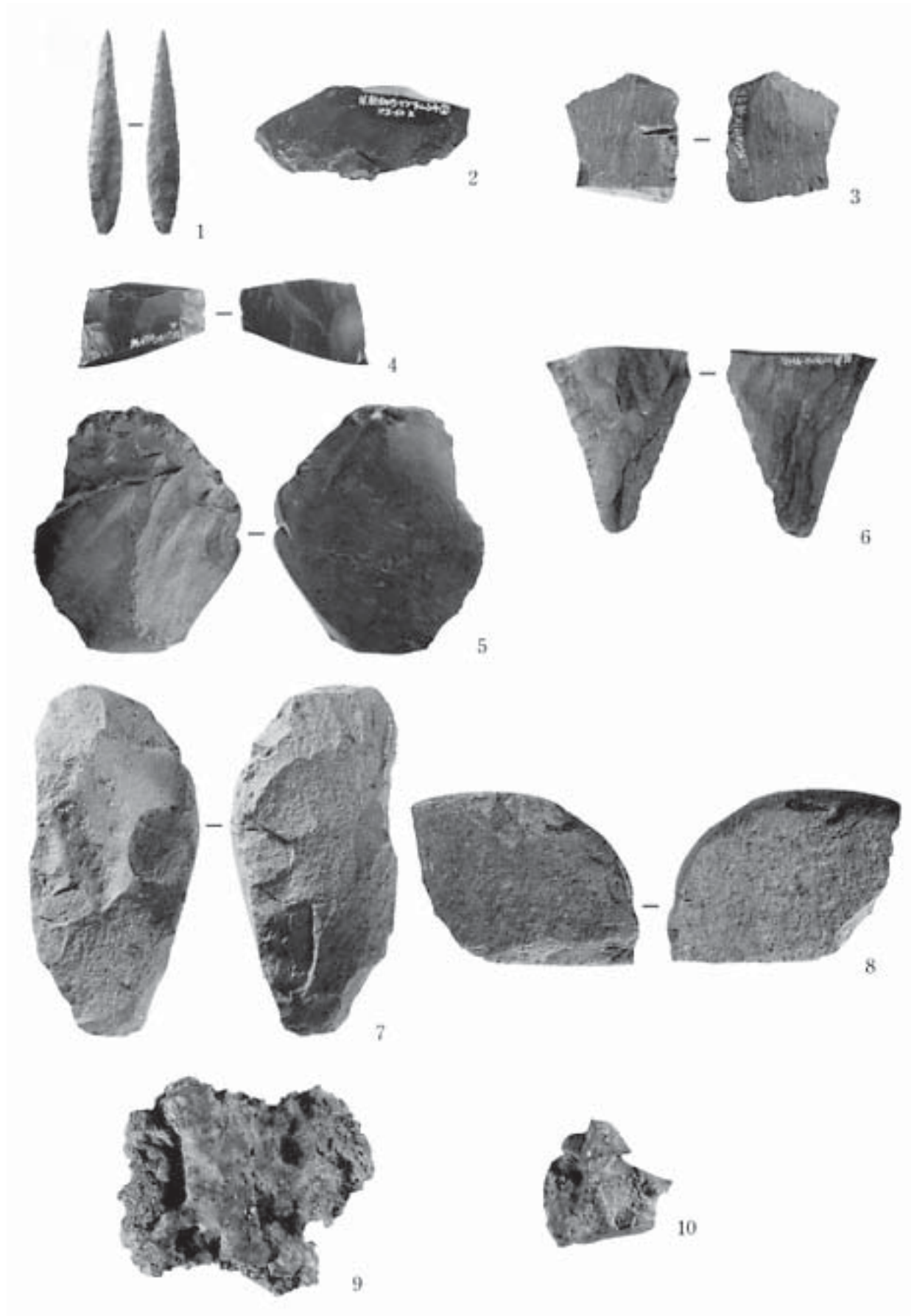


作業風景





写真图版 3



写真图版 4



報 告 書 抄 録

ふりがな	しんまちのいせきしくつちょうさほうこくしょ							
書名	新町野遺跡試掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	青森市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第33集							
編著者名	木村 淳一・設楽 政健							
編集機関	青森市教育委員会							
所在地	〒030 青森県青森市中央一丁目22-5 TEL0177-34-1111							
発行年月日	西暦 1997年3月25日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
しんまちのいせき 新町野遺跡	あおもり 青森県青森市  しんまちのあさすがたに 新町野字菅谷	02201	161	40° 46 00	140° 45 10	19961016 ~ 19961121	1,500	牛館川防災調整池造成事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
市内遺跡	集落跡	縄文時代  平安時代	竪穴式住居 8軒 土坑 32軒 埋設土器 4基		縄文土器 土師器 須恵器			

引用文献

- |          |      |                  |          |       |                       |
|----------|------|------------------|----------|-------|-----------------------|
| 青森市教育委員会 | 1965 | 『四ツ石遺跡調査概報』      | 青森市教育委員会 | 1995a | 『横内遺跡・横内(2)遺跡発掘調査報告書』 |
| 青森市教育委員会 | 1986 | 『田茂木野遺跡発掘調査報告書』  | 青森市教育委員会 | 1995b | 『桜峯(2)遺跡発掘調査報告書』      |
| 青森市教育委員会 | 1987 | 『横内城跡発掘調査報告書』    | 青森市教育委員会 | 1996  | 『小牧野遺跡発掘調査報告書』        |
| 青森市教育委員会 | 1991 | 『山吹(1)遺跡発掘調査報告書』 | 葛西励・高橋潤  | 1989  | 『青森市小牧野遺跡発掘調査報告書』     |

## 既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財	1	1962 『三内霊園遺跡調査概報』
〃	2	1965 『四ツ石遺跡調査概報』
〃	3	1967 『玉清水遺跡調査概報』
〃	4	1970 『三内丸山遺跡調査概報』
〃	5	1971 『野木和遺跡調査報告書』
〃	6	1971 『玉清水 遺跡発掘調査報告書』
〃	7	1971 『大浦遺跡調査報告書』
〃	8	1973 『孫内遺跡発掘調査報告書』
		1979 『螢沢遺跡』
		1983 『四戸橋遺跡調査報告書』
青森市の埋蔵文化財		1983 『山野峠遺跡』
〃		1985 『長森遺跡発掘調査報告書』
〃		1986 『田茂木野遺跡発掘調査報告書』
〃		1986 『横内城遺跡発掘調査報告書』
〃		1988 『三内丸山 遺跡発掘調査報告書』
青森市埋蔵文化財調査報告書第 16 集		1991 『山吹（1）遺跡発掘調査報告書』
〃	第 17 集	1992 『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』
〃	第 18 集	1993 『三内丸山（2）遺跡発掘調査概報』
〃	第 19 集	1993 『市内遺跡発掘調査報告書』
〃	第 20 集	1994 『小牧野遺跡発掘調査概報』
〃	第 21 集	1994 『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第 22 集	1994 『小三内遺跡発掘調査報告書』
〃	第 23 集	1994 『三内丸山（2）遺跡・小三内遺跡発掘調査報告書』
〃	第 24 集	1995 『横内遺跡・横内（2）遺跡発掘調査報告書』
〃	第 25 集	1995 『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第 26 集	1995 『桜峯（2）遺跡発掘調査報告書』
〃	第 27 集	1996 『桜峯（1）遺跡発掘調査概報』
〃	第 28 集	1996 『三内丸山（2）遺跡発掘調査報告書』
〃	第 29 集	1996 『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第 30 集	1996 『小牧野遺跡発掘調査報告書』
〃	第 31 集	1997 『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第 32 集	1997 『桜峯（1）遺跡発掘調査概報』
〃	第 33 集	1997 『新町野遺跡試掘調査報告書』
〃	第 34 集	1997 『葛野（2）遺跡発掘調査報告書』
〃	第 35 集	1997 『小牧野遺跡発掘調査報告書』

---

### 青森市埋蔵文化財調査報告書第 33 集

#### 新町野遺跡試掘調査報告書

発行年月日 平成 9 年 3 月 25 日

発行 青森市教育委員会

〒030 青森市中央一丁目 22 - 5

TEL 0177 - 34 - 1111

印刷 第一印刷株式会社

〒038 青森市石江字江渡 3 - 1

TEL 0177 - 82 - 2333

---